

ドゥクローは言っています、俳優はまる裸ですべてのものが表現できなければならないのだ、と。かれは肉体を楽器のように使い、象徴か運動か、そのいずれかで感情を提示するところへ行きつくのです。この場合、顔が役を演じるということはありません。マスクと同じことだからです。ただ肉体だけが表現力をもつのです。たとえば、飢え、乾き、死、愛、幸福。肉体は、敵とか邪魔者とか、やっつけるべき相手をも表現するということです。平衡は俳優術のカギです。だいいち風なんて眼にみえないものなのですからね。私たちはそれを見えるようにしなければなりません。まともに風を受けたときのことを、私たちはどうやって表現しますか？体のバランスをとりながら、風の抵抗感をくりかえします。水の中を歩く場合だっておなじことですね。つまり人間と人間をとりまくいろんな要素とを一致させるということです。ドゥクローはそのことから、ひとつの彫刻ふうなマイム術をつくりあげたのです。表現主義がバレエに影響をあたえたといえるかもしれません。そういう意味でドゥクローは文法をこしらえた最初の人です。でも、あれはパントマイムではありません。かれは（身振り）俳優だったのです。

P.21 「パントマイム芸術」 1971年第1刷発行 てすびす双書63 未来社
(原書1956年 Herbert Jhering・Marcel Marceau
"Die Weltkunst der Pantomime" Aufbau-Verlag Berlin)

